『西南アジア研究』No. 88, 2018

12世紀エジプトのターリブ裔系譜学者 シャリーフッディーン・ジャウワーニー

Sharif al-Din al-Jawwani: A Talibid Genealogist from Twelfth-Century Egypt

森　本　一　夫
Kazuo MORIMOTO

Abstract This article examines the career and traits of Sharīf al-Dīn Muḥammad b. As'ad al-Jawwānī (1131-92), an Egyptian genealogist and historian of Ḥusaynid descent, with special reference to his expertise in the genealogy of the Ṭālibids (i. e., *sayyid*s and *sharīf*s). Al-Jawwānī enjoyed a reputation as an authoritative expert of Ṭālibid and Arab genealogy, and over the course of his career, he served the Fāṭimids as the head (*naqīb*) of the *sharīf*s of "Miṣr" and then served sultan Ṣalāḥ al-Dīn as a regular attendant in his court. Available information about his written works shows that his expertise lay in the Ṭālibids' genealogy and history, Arab genealogy more generally, hadith transmission and criticism, and the topography of Cairo. It also reveals that al-Jawwānī identified himself as a Sunni, at least outwardly and most probably already during the Fāṭimid period. In terms of his knowledge of Ṭālibid genealogy, al-Jawwānī can be considered an heir to the founding figures of the discipline of Ṭālibid genealogy in the 10th and the 11th centuries, such as Shaykh al-Sharaf al-'Ubaydalī (from 11th-century Iraq), Abū'l-Ḥasan al-'Umarī (from 11th-century Iraq), and Abū'l-Ghanā'im al-Dimashqī (from 11th-century Syria). This finding contributes to the author's ongoing project to reconstruct the history of the discipline during the 12th to the 15th centuries. This period contrasts with the formative period in the 10th and the 11th centuries in that the later genealogists tended to operate in terms of the local schools of their respective regions (e.g., Iraq, Khurāsān, and Egypt-Syria), rather than in terms of a trans-regional scholarly network, which had enabled the discipline's foundation during the 10th to 11th centuries. Al-Jawwānī's case helps the present author locate the scholarly tradition of Egypt-Syria in this broader context. In addition, this study identifies al-Jawwānī's promotion of tomb visitation in Cairo as a practice that was specifically linked to that genealogist's Cairene background.

Keywords al-Jawwani (ジャウワーニー), genealogy (系譜学), *sayyid*s/*sharif*s (サイイド・シャリーフ), knowledge transmission (知の伝達), Egypt (エジプト)

はじめに

「サイイド」や「シャリーフ」などと呼ばれムスリムの崇敬を広く集めるアリー一族の者たちに関する系譜学は，彼らの血統が持つ幅広い含意のゆえに，それを通じて社会の様々な側面を見ることを可能とする興味深い研究材料の一つとなっている。筆者もこれまでに，系譜の書物の検討を通じて，アリー一族の血統が持つ社会的構築物としての性格を論じたり，アリー一族の血統を称する特定の家系を取り巻く地域政治上の動向を指摘したり，アリー一族を対象とする系譜学を梃子とした特定の宗派コミュニティによる利益追求を論じたりしてきた［Morimoto 1999 : 564-569 ; 2007 ; 2016 : 673-683］。

系譜学を通じて系譜学の外側の事象を研究するためには，しかし，その礎として系譜学自体のことを明らかにしなければならない。系譜学者たちの関心，活動内容，著述活動のあり方など，検討課題は少なくない。そしてそのような課題の一つに，学者たちの間の学問的な系統関係の解明，それを通じた様々な学統の展開の跡づけという問題がある。本稿は，西暦12世紀のエジプトとシリアで活動したフサイン裔の系譜学者シャリーフッディーン・ジャウワーニー（Sharīf al-Dīn Muḥammad b. As'ad b. 'Alī al-Jawwānī）を取り上げその人物像を議論するものであるが，その一義的な関心は，彼が生きた12世紀のエジプトとシリアが，アリー一族を対象とする系譜学の展開の中でどのように位置づけられるかを考えることにある。

アリー一族を対象とする系譜学は，9世紀半ば頃にアラブ諸部族の系譜を対象とするアラブ系譜学から分かれ出て独自の発展を遂げた。その確立過程は，10〜11世紀に西トルキスタンとエジプトを東西の両端とする地域で起こった系譜学者たちの間でのネットワークの成立と，そのネットワークに属す系譜学者たちの間に生じていった世代をこえた師弟関係の網によって特徴づけられる。広域的なネットワークを通じて各地の情報が突き合わされ，それが以前からのアラブ系譜学の成果と接合されることを通じて，アリー一族の系譜の全体像についての一定の共通理解が確立し，それが人的繋がりをもった専門家たちの間で受け継がれるようになっていったのである［Morimoto 1999］。

こうして10〜11世紀に確立したアリー一族を対象とする系譜学は，私見では，12世紀以降，各地で局地的な学統にまとまる傾向を見せる。特に重要なのがイラクの学統であり，これはヒッラ，ナジャフ，カルバラーといった都市の十二イマーム派コミュニティにおいて存続し，14世紀から15世紀にかけて活動したイブン・イナバ（Ibn 'Inaba ; 828/1425年没）という，史上最もよく知られたアリー一族系譜の専門家を生み出した。またホラーサーンにおいても，13世紀初頭にいたるまで，10〜11世紀の分野確立期の学者たちの成果を継ぎながらも引用関係などにおいて局地化の様相を見せていた学統の存在が確認できる[1)]。では，

1） イラクとホラーサーンの学統についてはさしあたり森本 2004 : 116-195 ; Morimoto 2016 参照。

この局地化の局面において，かつての広域ネットワークの西端に位置したエジプト，そしてその東隣のシリアではどのような展開が見られたのであろうか。両地域におけるアリー一族を対象とする系譜学とはどのようなものだったのであろうか。本稿で具体的に考えてみたいのはこの問題である。

本稿で明らかとなるのは，ジャウワーニーもまた10〜11世紀の分野確立期の系譜学者たちの学問伝統を継ぐ学者だったことである。しかし同時に，ジャウワーニーの活動にはエジプトの系譜学者ならではの特徴も見て取ることができる。フサイン廟やサイイダ・ナフィーサ廟の存在が示すようにエジプトはアリー一族に対する崇敬という点においても注目に値する地域である。それゆえこの地域でのアリー一族を対象とする系譜学の展開はそれ自体一つの興味深い研究課題となるが，本稿はその課題にも資するものとなろう。なお，ジャウワーニーは各種のイスラーム百科事典に項目が立てられる程度には知られた人物であり現代の系譜学者人名事典においても立項されているが［Rosenthal 1963 ; Öz 1993 ; Morimoto 2019 ; Kammūna 1972 : 300-305 ; Mar'ashī 1989-90 : 54-56 ; Abū Zayd 1998 : 169-170］，管見の限り，伝記的事実の羅列をこえて彼を何らかの歴史的文脈に位置づけようとした研究は存在しない。

以下，まずジャウワーニーの人物像を全体的に記し，続けて彼の著作と宗派的帰属に触れる。その上でアリー一族を対象とする系譜学の展開の中での彼の位置を，主として学問分野確立期の系譜学者たちとの関係に着目しながら論じる。なお，本論で触れる彼の著作の題名からも明らかなように，ジャウワーニーにとってアリー一族の系譜を学び記述する際に標準的であった系譜上の分節単位は，彼の時代には一般的であったように，ターリブ裔（アリーの父アブー・ターリブを祖とする父系出自集団）であった。それゆえ以下では，ここまでアリー一族を対象とする系譜学と記してきた対象をターリブ裔系譜学，それに従事する系譜学者をターリブ裔系譜学者と呼ぶこととしたい。ただし，ターリブ裔系譜学者はターリブ裔に特に強い専門性を持つ系譜学者であったが，その知識は必ずしもターリブ裔に限られたわけではなく，程度の差はあれアラブ系譜一般にも知識を持つのが普通であったことは断っておかなければならない。

I　ジャウワーニーの経歴

ジャウワーニーについては，エジプトやシリアで編纂された諸種の人名事典に項目が設けられており，それを利用することができる[2)]。ジャウワーニーは525/1131年に，サナーウ

2）以下のものがより詳しい内容を載せる：'Imād al-Dīn 2005 : 1 : 117-119 ; Mundhirī 1984 : 1 : 177-178 ; Ibn al-Ṣābūnī 1957 : 100-104 ; Qifṭī 1970 : 147-148 ; Ibn Ḥajar 2002 : 6 : 562-565 ; Maqrīzī 1991 : 5 : 306-308。その他の人名事典類については Jawwānī 1962 : 3, n. 1 ; Jawwānī 2006 : 10-12 を見よ。以下，特に典拠を示さない場合，本文におけるジャウワーニーの経歴に関する記述はこれらの文献で繰り返し言及される内容に依拠している。

ルムルク・アスアド（Sanā' al-Mulk Abū'l-Barakāt As'ad b. 'Alī al-Jawwānī；559/1163-64年没）の子として生まれた。アスアドは統語論の学者としてよく知られた人物で，モスルからエジプトへの移住の後，ファーティマ朝宮廷で地位を占めていた。史料によってはカーディーであったともされる[3]。

アスアドの息子ムハンマド，すなわち本稿の主題であるジャウワーニーは，ファーティマ朝支配からアイユーブ朝支配へという変動を生き抜き，588/1192-93年に没している。彼がファーティマ朝期に「ミスル」（エジプト，ないしフスタートも含む意味でのカイロ都市圏を指すと考えられる）のナキーブ職を占めたことがあるのは間違いない。彼のナキーブ在職は547/1152-53年に始まったと考えられ，史料中の報告によると，アサドゥッディーン・シールクーフとサラーフッディーン・アイユーブに率いられたザンギー朝勢力によってアブー・アッダラーラート（Abū'l-Dalālāt）というイラン系の人物（rajul A'jamī）と交代させられるまで続いた[4]。ジャウワーニーと面識があったキフティー（568/1172～646/1248年）によると，ジャウワーニーはミスルのナキーブ職を免じられた後，「イスマーイールの子孫である，宮殿の主［＝ファーティマ朝カリフ］の親族たちの大ナキーブ職」（niqābat al-nuqabā' al-aqārib min wuld Ismā'īl ansibā' ṣāḥib al-qaṣr）を与えられたという[5]。これはジャウワーニーをナキーブ職から退ける際に使われた閑職であったと考えてよかろう。また，この職がファーティマ朝滅亡以後も存続したとも考えにくい。いずれにしても，ジャウワーニーはナキーブ職を退いてから（一時的に？）系譜の分野での著述活動に専心したという['Imād al-Dīn 2005 : 1 : 117 ; Qifṭī 1970 : 148]。一部の史料はジャウワーニーがカーディー職を占めたとし，管轄地としてミスルに言及するものもある。しかし，彼が実際にカーディー職を占めたとして，在職時期など他の事項については何も分からない[6]。

3）　アスアドについては 'Imād al-Dīn 2005 : 1 : 119-120 ; Qifṭī 1986 : 1 : 265 ; Yāqūt 1993 : 2 : 645 参照。Qifṭī 1970 : 147-148 ; Maqrīzī 2002-04 : 3 : 38, 4 : 865 も見よ。Maqrīzī 1991 : 2 : 80-81 にはモスルに定着する前のアスアドの経歴を述べたとする記述が見られる。しかし，その記述内容は明らかに悪意にもとづいた現実離れしたものであり，信頼できない。カイロにおけるアスアドの墓の場所については Ibn al-Zayyāt 1907 : 89 ; Sakhāwī al-Ḥanafī 2014 : 144 参照。

4）　ナキーブ職就任の年については Ibn al-'Adīm 2016 : 3 : 402 参照。Öz 1993 では 556/1161 年とされている。アブー・アッダラーラートがジャウワーニーに取って代わったことについては，Qifṭī 1970 : 14 ; Ibn al-Ṣābūnī 1957 : 99, n. 1。系譜学者であったとされるこの人物のカイロにある墓については，Ibn al-Zayyāt 1907 : 302 ; Sakhāwī al-Ḥanafī 2014 : 221 参照。

5）　Ibn al-Ṣābūnī 1957 : 99, n. 1. この注で翻刻されているキフティー著『詩人であったムハンマドたち』中のテクストは，同書校訂本のテクスト［Qifṭī 1970 : 148］よりも明らかに優れている。ジャウワーニーはアリー・ザイヌルアービディーンの子フサイン・アスガルの血統を称していたので，ジャアファル・サーディクの子イスマーイールの子孫とは見なされえなかった。彼がイスマーイールの子孫たちの代表者を意味するナキーブ職に任じられたという報告は，この観点からは不自然である。

6）　Ibn Muhannā n. d. : 110a においてミスルのカーディーとされる。Ibn 'Inaba 2004 : 389 も参照。Al-Maqrīzī 1991 : 5 : 306 では「高貴なるカーディー」（al-qāḍī al-ashraf）と呼ばれている。『ファーディルのための入門書』（*al-Muqaddima al-fāḍiliyya*）の序文におけるカーディー号の使↗

ジャウワーニーがファーティマ朝末期に不遇の時期を過ごしたことは明らかである。しかし彼は，子細は不明であるものの，この時期を乗り切っている。ジャウワーニーは，他ならぬサラーフッディーン，そしてその側近であるカーディー・ファーディルの側近くに仕えるようになったのである。例えば彼は584/1188年にアレッポを訪問しているが（詳細下記），それはシリアで軍事行動を進めるサラーフッディーンの軍営を，サラーフッディーン自身の許可を得て離脱した上でのことであったという。ジャウワーニーはまたサラーフッディーンに書物を献呈してもいる。少なくとも2作品，アラブの系譜を扱う『部族と枝族に関する隠れた宝石』（*al-Jawhar al-maknūn fī al-qabā'il wa'l-buṭūn*；「全10巻」）と，一般に『ムハンマドの樹』（*al-Shajara al-Muḥammadiyya*）という題名で知られる預言者ムハンマドの系譜を主題とした短い作品がこれに該当する[7]。同様に，アラブ系譜に関する『ファーディルのための入門書』（*al-Muqaddima al-fāḍiliyya*）は，題名が示す通りカーディー・ファーディルに献呈されている［Jawwānī 2006：40］。

ジャウワーニーが生前から系譜学の権威とされていたことは間違いない。彼と同時代の人物で，サラーフッディーン宮廷での両者の立場から面識もあったと推測されるイマードゥッディーン・イスファハーニー（519/1125～597/1201年）は，ジャウワーニーを系譜学の分野で無比の人物（*awḥad*）と形容している［'Imād al-Dīn 2005：1：117］。アレッポのイブン・アル=アディーム（588/1192～660/1262年）が著した地方誌人名録『探求の逢着点』（*Bughyat al-ṭalab*）で引用される584/1188年のアレッポ訪問についてのジャウワーニー自身による記述からも，晩年のジャウワーニーがターリブ裔系譜の権威として扱われていたことが理解される。それによると，アレッポに到着したジャウワーニーは市門で同市のナキーブの出迎えを受け，そのままナキーブの私邸に滞在した。するとアレッポのシャリーフたちが，自分の系譜の正しさを認めてもらおうとジャウワーニーのもとに殺到した（*inthāla*）という[8]。アレッポのシャリーフたちにとって，ジャウワーニーは，その系譜の正しさの承認を得ようと努力するに値する権威的な系譜学者だったのである。

ジャウワーニーが権威的な系譜学者として扱われた背景に，サラーフッディーン宮廷の一員としての彼の立場が作用していたのは間違いなかろう。それだけでなく，『ファーディルのための入門書』の序文でジャウワーニーの名に付される「信徒の長の系譜学者」（nassābat amīr al-mu'minīn）という称号からは，彼がアイユーブ朝当局者たちにより同朝領域における系譜学の第一人者と認知されていたことが窺われる。カリフへの直接的な言及

↘ 用については注9参照。

7） Jawwānī 1996：1；Jawwānī 2006：68. 加えて『サッラームいう名の父を持つ者たちとサラームという名の父を持つ者たちの弁別についての小論』（Jawwānī 1962）は，サラーフッディーン臨席のもとで行われたブハーリー正伝集講読会における学者たちの意見の不一致を解決するために著されている［Jawwānī 1962：9］。

8） Ibn al-'Adīm 2016：3：403-404. Morray 1994：53-54も参照。

を含むこの称号は，学者たちが仲間内で用いた，あるいは後の書写生が賞賛のために作り出した呼称というよりは，カリフ自身の承認の有無は別としても，アイユーブ朝当局によってカリフの名で授与・認可されたものと考えるのが自然であろう[9]。

ジャウワーニーがアイユーブ朝期に再びナキーブ職に任じられたことを示す史料中の記述もある。ムンズィリー（581/1185-86～656/1258年）が，その人名事典中のジャウワーニーの息子（616/1219年没）に関する項目で，彼が「ミスルの大ナキーブ職」を「彼の父の後に」占めたと記しているのがそれである［Mundhirī 1984 : 2 : 456-457］。ジャウワーニーがファーティマ朝末期に解任された際の後任はアブー・アッダラーラートであったと報告されていることを考えると，これはそれ以後の返り咲きとそれに続く息子への地位の継承を示しているように見受けられる。ジャウワーニーが，アイユーブ朝期に著した二つの作品の序文でそれぞれ「大ナキーブ」（naqīb al-nuqabā'），「ミスルにおける大ナキーブ」（naqīb al-nuqabā' bi-Miṣr）と呼ばれていることも，あるいはアイユーブ朝期の再任を示唆するものと解釈できるかもしれない[10]。

以上のような権威的な系譜学者としての地位にもかかわらず，学者，特にハディース学者としてのジャウワーニーの信頼性に疑問を呈す根強い声があったことにも触れておきたい。ジャウワーニーと面識があったキフティーによれば，ジャウワーニーの饒舌は聴き手に彼が嘘を言っているのではないかと疑わせるほどであったという［Qifṭī 1970 : 148］。このような否定的な評価は後世にも受け継がれている。イブン・ハジャル・アスカラーニー（773/1372～852/1449年）は，ジャウワーニーに対して最も「辛口の」人名事典作家と言えるが，ジャウワーニーのハディース学者としての信頼性に関する複数の学者の否定的な見解を引用するだけでなく，彼の著作は多くの「表面的で不正確な言明」（mujāzafāt）を含むという自らの見解を述べている［Ibn Ḥajar 2002 : 6 : 562-563］。イブン・ハジャルは系譜学者として

9）『入門書』はアイユーブ朝期に入ってから著された作品であることを考えると，ここでのカリフはアッバース朝カリフを指すと考えるのが自然である。ただし，ジャウワーニーは同じ箇所で「至大なるカーディー」（al-qāḍī al-ajall），「大ナキーブ」（naqīb al-nuqabā'），「カリフ位の誇りにしてその血統正しき者」（fakhr al-khilāfa wa-nasībuhā）とも呼ばれている。ジャウワーニーがカーディー職やナキーブ職を占めたのはファーティマ朝期のみのことであったと考えるならば（ただし，ナキーブ職については本文直下での議論を参照），ここでの称号類は，どの時期のものであるかという問題への顧慮を欠いたまま，無造作に並べられていると考えるのがよいということになろう。なお，Ibn Rajab 2005 : 1 : 154-155には，シリア在住のハズラジュ族出身の学者がエジプトのジャウワーニーに自らの系譜の詳細について質問したことが記されているが，質問者の生没年（554/1159～634/1236年［Ziriklī 1998 : 3 : 340］）からは，このやりとりがアイユーブ朝期に行われたものであることが強く推定される。問題の記述に続けて，ジャウワーニーが側近く控える中でサラーフッディーンが問題のハズラジュ族出身者の出自について行った発言が記録されていることにも注意［Ibn Rajab 2005 : 1 : 156］。

10）『ファーディルのための入門書』での事例については前注参照。「ミスルの大ナキーブ」は『ムハンマドの樹』の序文［Jawwānī 1996 : 1］に見られる。もちろん，これらがファーティマ朝期の在職に言及したものである可能性は否定できない。

のジャウワーニーの信頼性についても否定的である。彼は，ジャウワーニーが著名なハディース学者スィラフィー（Ṣadr al-Dīn Abū Ṭāhir al-Silafī；472/1078-79～576/1180年）に対し，彼のニスバ（由来名）が「スィラファ」というアラブの部族名に由来するのかを尋ねたという逸話を記し，「これがジャウワーニー［一流］の注意力欠如［の一例］である」（fa-hādhā min tahawwur al-Jawwānī）と付け加えている。当の部族名は実は「スラファ」と読むのが正しいからである[11]。こうした否定的な評言は，しかしながら，大勢において，そして少なくとも系譜学の分野では，ジャウワーニーの評価にそれほど大きな影響を与えなかったように見受けられる[12]。ヌワイリー（677/1279～733/1333年），イブン・ファドルッラー・ウマリー（700/1301～749/1349年），マクリーズィー（766/1364～845/1442年）というマムルーク朝期の3人の学者の著作からは，彼らがジャウワーニーをターリブ裔系譜・アラブ裔系譜の分野での信頼に値する学者と認識していたことが窺われる[13]。

Ⅱ　ジャウワーニーの著作と宗派

ジャウワーニーの著作は，その題名だけが知られているものも含めれば20点あまりを数える[14]。そのうち題名などからターリブ裔系譜と特に深く関係する主題を持つと判断されるものは以下の通りである。『ターリブ裔の諸世代』（*Ṭabaqāt al-Ṭālibiyyīn*），『ターリブ裔血統を持つ系譜学者の諸世代』（*Ṭabaqāt al-nassābīn al-Ṭālibiyyīn*），『イドリース裔系譜についての貴く公正なる書』（*al-Munṣif al-nafīs fī nasab Banī Idrīs*），『アルカト裔系譜』（*Nasab Banī al-Arqaṭ*），『ジャウワーニー裔系譜』（*Nasab Banī al-Jawwānī*），『ムハンナー裔系譜についての苦しむ心の喜び』（*Nuzhat al-qalb al-mu'annā fī nasab Banī Muhannā*）[15]，『シャリーフ血統を持つ系譜学者たちの［＝に関する］要約であるところの探究者への贈り物』

11）Ibn Ḥajar 2002：6：564．両人の間でのやりとりは注2で示した他の人名事典類でも言及されているが，いずれもジャウワーニーの部族名誤読への言及を欠く。

12）イブン・ハジャルは『秤の舌』（*Lisān al-mīzān*）において，ハディース伝承者としてのジャウワーニーに大きな不信感を抱いていたことを示す，著名なハディース学者ラシードゥッディーン・アッタール（584/1153～662/1264年）の言を引用している［Ibn Ḥajar 2002：6：562］。しかし，同じラシードゥッディーンは，別文献において，ジャウワーニーの著作（複数）ほど明確な内容を持つ本は見たことがないと述べたとされている（ただしハディース学関係の著作は言及されていない）［Ibn al-Zayyāt 1907：89；Sakhāwī al-Ḥanafī 2014：144］。ラシードゥッディーン・アッタールについては，Ṣafadī 1931-2004：28：239-241など参照。

13）Nuwayrī 2004：2：295-373；'Umarī 2010：23：553．Nuwayrī 2004の該当箇所はアラブ系譜の全般的な記述であるが，その内容は『ファーディルのための入門書』に全面的に依拠している。マクリーズィーによるジャウワーニーの見解の引用については後述（注28の箇所）。

14）以下の諸文献に見られる一覧にもとづく。Maqrīzī 1991：5：307-308；Jawwānī 2006：12-23（intro.）；Brockelmann 1937-49：S-1：626．ジャウワーニーの著作に関する以下の記述のうち特に典拠を示していない事項についてはこれら3文献において確認可能である。

15）題名中の“*al-mu'annā*”はIbn Muhannā n. d.：110；Ibn al-'Adīm 2016：503, 509より採用。

(*Tuḥfa al-ṭālibīn fī ikhtiṣār al-ashrāf al-nassābīn*)[16]。これらに加え，ジャウワーニーはサイイダ・ナフィーサ（伝 208/824 年没）とカイロ在のその廟の美質についての作品，また『シャリーフたちの墓廟』(*Mazārāt al-ashrāf*) と題された，その題名からカイロに存在する預言者一族の廟を扱ったことが理解される作品を著している[17]。残念ながら，これらの作品はどれも現存が確認されていない[18]。しかし，これらのターリブ裔関係の著作の題名を見回してみると，いずれもターリブ裔と関係する特定の主題に特化しており，最初の『ターリブ裔の諸世代』以外はターリブ裔の系譜を全体として扱ったような書物ではなかったことが了解される。あるいはこのことは，後述のように彼が 10〜11 世紀のターリブ裔系譜学者たちに多くを負う立場にあったことと関連しているかもしれない。つまり，彼は先行の系譜学者たちが著した網羅的な系譜の書物の存在を前提として著述活動を行っていた可能性が指摘できる。

ジャウワーニーはターリブ裔という枠をこえた主題設定のもとでも系譜の文献を著している。*al-Muṭahhara min tashājur al-ilbās* [*sic*] *fī nasab khulafā' Banī al-'Abbās* という作品は，ジャウワーニー自身が "mushajjar" と呼んでいることからその語が示すところの樹形図形式の書物であったと判断されるが，その題名からアッバース裔を扱っていたことが明らかである [Jawwānī 2006 : 59-60]。サラーフッディーンに献呈された『部族と枝族に関する隠れた宝石』は，別作品でのジャウワーニー自身の言明により，アラブの部族名をアリフバー順に整序した事典であったと理解される [Jawwānī 2006 : 68]。現存する『ファーディルのための入門書』も，アラブ諸部族の系譜を対象とする書物と性格づけられうる[19]。同様に現存する『ムハンマドの樹』も，預言者や彼と近しい関係にあった者たちの系譜を中心的な内容としており，基本的にアラブ系譜の書物と見なすことができる。題名のみが知られ，そこから「偽称者」を扱っていたと判断される『父親以外に対し親子関係を主張した者たちや真に

---

16) なお，マクリーズィーは『ターリブ裔血統を持つ系譜学者の諸世代』を挙げつつ，それとは別に『系譜学者の諸世代』(*Ṭabaqāt al-nassābīn*) という題名も挙げている (Maqrīzī 1991 : 5 : 307-308)。

17) サイイダ・ナフィーサを扱った作品の題名は様々な形で伝えられている [Rāgib 1976 : 67, n. 2]。『シャリーフたちの墓廟については』Rāgib 1973 : 262 参照。

18) 現代の系譜学者人名事典作者アブー・ザイドは，ジャウワーニー著『系譜学者の諸世代』の稿本がエジプトの国立図書館に所蔵されているとし，Dār al-Kutub al-Miṣriyya 1930 : 30-31, 81 を典拠として挙げている [Abū Zayd 1998 : 11]。しかし，同カタログの 30-31 頁で扱われているのは『ファーディルのための入門書』であることが明らかであるし，81 頁にはジャウワーニーによると判断されうる作品への言及は見られない。これについては，著者が同カタログを参照できない状態にあった際にカタログを点検し，30-31 頁所収の稿本の内容を現地図書館で確認して下さった中町信孝氏に謝意を表する。

19) 本書は預言者ムハンマドの系譜をアダムに向かって遡り，途中で分かれていったとされる諸系譜を分枝のたびに記述するものである。例えば記述がアブラハムに達した際にはその息子イサークの子孫（当然アラブではない）の系譜が記される。しかしながら，この書物の大半は南北アラブの系譜で占められている。

ワラー関係にある者以外に対しワラー関係を主張した者たちに関する不名誉な欠陥を欠いた［完璧な］書』（*Kitāb al-Wāḍiḥ 'an al-'ayb al-fāḍiḥ fī man idda'ā ilā ghayr abīhi aw intamā ilā ghayr mawālīhi*）については，イスラーム初期などに重要であったワラー関係への言及からあるいはアラブ系譜一般を対象としたものであったかとも思われるが，いかなる出自集団を扱ったものなのか不明である。ジャウワーニーはまた，60腕尺の長さを持ったという「全ての系譜を含む巻物」（darj fī jamī' al-ansāb）も著したという。

ジャウワーニーの著作はまた，『《正伝》に系譜が記されている者についての訂正の書』（*Kitāb al-Tanqīḥ fī man thabata nasabuhu fī al-Ṣaḥīḥ*）のような，系譜学とハディース学との両方にまたがる内容のものも含む。この著作は，今では題名が知られるのみであるが，おそらくブハーリーの『正伝』に現れるハディース伝承者たちの系譜を述べたものであったろう。『サッラームいう名の父を持つ者たちとサラームという名の父を持つ者たちの弁別についての小論』（*Mukhtaṣar min al-kalām fī al-farq bayn" man ism abīhi Sallām wa-Salām*）と題する現存する論考もまた，ハディース伝承者の父親の名前を扱ったものである［Jawwānī 1962］。ジャウワーニーはさらに，カイロの地誌に関する『地誌に関し不明瞭な事柄の明瞭化』（*al-Naqṭ li-'ajm mā ashkala min al-khiṭaṭ*）と題する書物を著している。この作品の伝存は確認できないが，マクリーズィーの著名なカイロ地誌『ヒタト』にしばしば引用されることが知られている[20]。他にも，ジャウワーニーが歴史的内容を（も）持つ書物も著しており，そうした書物ではカイロの外の事象も扱われていたことが，後世の文献での引用から了解される[21]。

ジャウワーニーの宗派的帰属については何が言えるであろうか。ジャウワーニーは少なくとも二つの，スンナ派的立場を顕示する題名を持つ書物を著している。『アブー・バクルというクンヤを持つ者たちの美質に関する拒否（rafḍ）と奸計の徒にとっての怒り［の種となる書］』（*Ghayẓ ulī al-rafḍ wa'l-makr fī faḍl man kunyatuhu Abū Bakr/man yukannā Abā Bakr*）は，サラーフッディーンの兄弟アーディル（540/1145または538/1143-44～615/1218年）のために著されたもので，初代カリフからアーディル自身にいたるまで，アブー・バクルという名を持った人々の美質を記した書物であったとされる[22]。シーア派が預言者後継位の簒奪者とするアブー・バクルへの肯定的な評価を示す主題のみならず，その題名に使われる「拒否と奸計の徒」という言葉からも，この作品が明確な反シーア派的姿勢を示すも

20）Maqrīzī 2002-04 : 1 : 10 et passim. Maqrīzī 2002-04 : 2 : 9にはカイロの地誌作家としてのジャウワーニーに対する信頼を示す記述が見られる。Sayyid 2001 : 80も参照。

21）Maqrīzī 2002-04 : 4 : 86（ハムダーン朝のサイフッダウラの時代にアレッポにおいてアザーンに「ムハンマドとアリーは最善の人間である」という文言が加えられたこと），1 : 202（［地誌的な内容とも言えるが，］ジャウワーニー自身が見聞した上エジプトの古代エジプト時代の神殿に見られる銘文について）．

22）ただしジャウワーニーに会ったことがあるとされるある人物の報告では，エジプトに到来したアブー・バクルたちについての書物であったとされる［Ibn Ḥajar 2002 : 5 : 713］。

のであったことは明白である。『[吉報を受けた] 十人の美質についての紙葉』(*al-Awrāq al-muḥarrara fī faḍā'il al-'ashara*)(「全10巻」)も，その題名からスンナ派が天国行きを約束された人々と見なす10人の教友たちの美質を扱っていたことが明らかであり，同様にスンナ派的立場を強く示す内容・題名を持つ作品であったと考えることができる。

ジャウワーニーがスンナ派的立場を喧伝していたことを示す証拠は，ヤークート・ハマウィー(574/1179または575/1179〜626/1229年)の通称『文人事典』(*Mu'jam al-udabā'*)に収録される彼の父アスアドの伝記項目にも見られる。ここではアスアドのものとされる詩がジャウワーニーの著作から引用されているが，その詩は預言者ムハンマドと吉報を受けた十人への愛情を，アリーの時代からアスアドの家系に受け継がれてきた伝統として呈示するものである。この詩はこうして，ファーティマ朝期の559/1163-64年に没したとされるアスアドだけでなく，歴代の先祖もまた一貫してスンナ派的立場を奉じていたことを主張するものとなっているのである [Yāqūt 1993 : 2 : 645]。

本稿で用いている人名事典類はスンナ派の著者によるものばかりであるが，その中でジャウワーニーの宗派的帰属が問題とされた形跡は見られない。マクリーズィーは彼の名に「マーリク派の」(Mālikī)というニスバを付しているが，これもスンナ派であったことを特に示そうとしてのことではなかったように見受けられる [Maqrīzī 1991 : 5 : 306]。唯一の例外はイブン・ハジャル・アスカラーニーである。彼は，ジャウワーニーは「スンナ派的立場を示していた」(kāna yuẓhiru al-sunna)と述べ，そのような態度の表れとしてアブー・バクルについての『怒り [の書]』に言及する。同時にイブン・ハジャルは，ジャウワーニーが，神とムハンマドのもとでのアリーの特別な地位を示した奇蹟として知られる「太陽の逆行」(radd al-shams)に関する言い伝えの様々な伝承経路を集めた小冊子を著したとも報告する[23]。イブン・ハジャルは以上により，ジャウワーニーはシーア派であった，あるいはイブン・ハジャルにとって好ましくない形でシーア派的な傾向を持っていたという自らの疑念を表明しているものと考えられる。

以上の情報からは，少なくともアイユーブ朝期に入ってからのジャウワーニーが，シーア派敵視を公然と表明する党派的なスンナ派として振る舞っていたことが明らかである。そのような態度は，以前のファーティマ朝下での地位にもかかわらず，ジャウワーニーがアイユーブ朝宮廷においても立場を築くのに有利に働いたであろう。これに対し，ジャウワーニーのファーティマ朝期の振る舞いについては確たる情報がない。しかし，イブン・ハジャルを除く人名事典類の著者たちが彼のシーア派帰属に一切言及していないことは注目されよう。ファーティマ朝期にナキーブ職を占めたジャウワーニーは，それ相応の注意関心を集める存在であったと考えられる。それゆえ，ザンギー朝・アイユーブ朝勢力到来以前の彼が

23) Ibn Ḥajar 2002 : 6 : 564. 熱心に預言者に仕えるあまり午後の礼拝の機会を逃したアリーのために太陽が逆行したというこの奇蹟の子細については，'Umarī 2010 : 23 : 486-487 など参照。

シーア派として知られていたとするならば，アイユーブ朝期に入ったジャウワーニーが行っていた上記のようなスンナ派的立場の喧伝は，史料作家たちによる何らかの反応を招くことになったものと考えられる[24]。このことを考えると，ファーティマ朝期のジャウワーニーも，少なくとも表面的にはスンナ派として振る舞っていたと考えるのが適当であろう。なお，イブン・ハジャルが言及する「太陽の逆行」への強い関心についても，一般論としてそれをシーア派への帰属に結びつけるのは性急であるのみならず，ジャウワーニーの場合については，彼自身が自分の関心を宗派的な見地から捉えていたわけではないと考える根拠があることに言及しておきたい[25]。

Ⅲ　ジャウワーニーのターリブ裔系譜学

系譜学の分野でのジャウワーニーの直接の師弟関係についての情報は限られている。人名事典類においてこの関連で名前が触れられるのは彼に教えたとされるイブン・ハイダラ・アルカティー（Thiqat al-Dawla Abū'l-Ḥasan Muḥammad b. Muḥammad b. Ḥaydara al-Ḥusaynī al-Arqaṭī）のみである[26]。しかも，この人物は確かに系譜学におけるジャウワーニーの最重要の師であったことが窺われるものの（下記），彼について名前以上のことは何も分からない。

ジャウワーニーが系譜学の教えを受けた人物として他に名前が知られる学者はあと二人しかいない。一人目は彼が558/1162-63年にズバイル・イブン・バッカール（172/788-89～256/870年）著『クライシュの系譜集成と諸伝承』（*Jamharat nasab Quraysh wa-akhbāruhā*）の教授を受けたキナーニー（Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Ibrāhīm b. Thābit

---

24）なお，Ṣafadī 1931-2004 : 2 : 202所収のジャウワーニーの伝記項目に見られる彼をシーア派とする言明は，同項目に著名な十二イマーム派学者イブン・シャフラーシューブ（Ibn Shahrāshūb；ジャウワーニーと同じヒジュラ暦588年没）に関する情報が混じり込んだ結果起こった混乱に過ぎない。この混乱は以前にもムスタファー・ジャワードによって指摘されている［Ibn al-Ṣābūnī 1957 : 100, n. 1］。

25）ジャウワーニーは『ファーディルのための入門書』において，太陽がヨシュアのために逆行したとされることに触れ，モーセに対するヨシュアの立場はムハンマドに対するアリーの立場と同様であったと述べている［Jawwānī 2006 : 123］。ここで注意しなければならないのは，『入門書』はサラーフッディーンの主たる相談役であったカーディー・ファーディルの名で，明白なスンナ派的立場から著されていることである（このことは例えば，文中に現れる教友が吉報を受けた十人に属す場合にそのことに繰り返し触れていることから理解されよう［例えば58, 61, 62］）。イブン・ハジャルの理解にかかわらず，ジャウワーニー自身は「太陽の逆行」という主題に何の宗派的立場も読み込んでいなかったと考えるのが適当なのである。「太陽の逆行」に関する伝承群の信頼性をめぐるスンナ派の学者たちの様々な見解については，前々注で引用した 'Umarī 2010の関連頁を参照。そこで示される見解は信頼性を認めるものも含む。

26）諸人名事典では，アルカティーのイスムはヤフヤーと記されている［例えばMaqrīzī 1991 : 5 : 308 ; Ibn Ḥajar 2002 : 6 : 563］。しかし，ジャウワーニー自身がこの師（shaykh）を2カ所でムハンマドと呼んでいる［Jawwānī 2006 : 113, 118］。

al-Kinānī al-Miṣrī ; 560/1164-65 または 562/1167 年没）である[27]。残る一人は上エジプト出身の系譜学者・歴史家であったジャマールッディーン・イドリースィー（Jamāl al-Dīn Abū Ja'far Muḥammad b. 'Abd al-'Azīz b. Abī'l-Qāsim al-Idrīsī al-Ḥasanī ; 568/1172-73～644/1246 または 649/1251-52 年）である。このうちイドリースィーとの交流はマクリーズィーのファーティマ朝史書『信仰正しき者たちにとっての教訓』（*Itti'āẓ al-ḥunafā'*）に見られるジャウワーニーからの引用の中で言及されている。そこでジャウワーニーは，ファーティマ朝系譜の真正性についてイドリースィーに質問したと述べ，その返答を記している[28]。ただし，この言明には疑問も残る。両者の生没年から明らかなように，イドリースィーはジャウワーニーよりはるかに年少であった。ジャウワーニー自身がファーティマ朝の系譜とそれに対する様々な評価をよく知らなかったとは考えにくいことも踏まえると，ジャウワーニーはここで，ファーティマ朝の血統という政治的に微妙となりうる問題についての記述内容の責任をイドリースに転嫁しようとしている可能性がある。

このように，直接の師たちに関する情報は限られているが，ジャウワーニー自身のターリブ裔系譜に関する知識が，また彼が活動した環境において行われていたターリブ裔系譜学が，どのような学問系統に繋がるものであったのかを考える材料がないわけではない。『教訓』中に見られる上記のジャウワーニーからの引用のうち，先行する系譜学者たちの見解が呈示される最初の数段落もその一つである［Maqrīzī 1996 : 1 : 17-18］。そこではまずイドリースィーとの上記のやりとりが記述され，イドリースィーの言として，先行の系譜学者たちの見解が，ファーティマ朝が主張した出自を認めた者たち，認めなかった者たち，判断を表明しなかった者たちの三つのグループに分けて呈示される。ファーティマ朝の預言者に連なる血統を認めた者たちとして挙げられるのはシャイフッシャラフ・ウバイダリー（Shaykh al-Sharaf al-'Ubaydalī ; 338/949-50～437/1045-46 年），アブー・アル=ハサン・ウマリー（460/1067-68 年頃没？；文中では "Ibn Milqaṭa al-'Umarī"），そして「アブー・アブドゥッラー・ブハーリー」である。血統を否定したグループに入るとされるのは，イブン・ハズム（384/994～456/1064 年），「シャリーフ・イブン・アル=アービド」，そしてマーリク派の著名な法学者サフヌーン（160/777～240/855 年）の弟子（あるいは見解の追随者）であったとされる「イブン・ワキーウ」（Ibn Waqī'）である。見解の表明を控えた系譜学者たちとしては，アブー・アル=ガナーイム・ディマシュキー（378/988～438/1046-47 年）の父とおじ[29]，イブン・ハッダーウ（Ibn Khaddā' ; 310/923～361/971-72 年以降），シャブル・イブ

27） この関係はキョプリュリュ図書館所蔵の稿本にジャウワーニー自身が書き込んだ教授・学習記録から判明する。Ibn Bakkār n. d. : 1a, 54b, 125a ; Jawwānī 2006 : 14（intro.）．キナーニーについては Ziriklī 1998 : 5 : 296 参照。

28） Maqrīzī 1996 : 1 : 17．やりとりがあったのはカイロでのことであったとされている。イドリースィーについては Maqrīzī 1991 : 6 : 84-85 ; Ziriklī 1998 : 6 : 208 参照。

29） 文中では「ザイドの子孫である（al-Zaydiyyān）ムハンマド・ムバルカウ（al-Mubarqa'）とその兄弟ハサン」とある。両人の同定にあたっては Ibn 'Inaba 2004 : 325 を参照した。

ン・タキーン（Shabl b. Takīn al-Bāhilī al-Miṣrī; 4/10世紀）の名が挙げられている。イドリースィーとの問答にもとづく以上の記述が終わると，次にはアブー・アル=ガナーイム・ディマシュキーの著作からの直接の引用がなされる。その内容は，ファーティマ朝系譜とも深く関係する，ジャアファル・サーディクの子イスマーイールの子ムハンマドの子ジャアファルの子たちのうち誰が子孫を残したかという問題に関するディマシュキー自身の見解である［Maqrīzī 1996 : 1 : 18］。

マクリーズィーによる引用によって伝えられたジャウワーニーのこの記述内容は，ジャウワーニーが活動した環境において，10〜11世紀のターリブ裔系譜学確立期の系譜学者たちが権威と認識され，その見解が伝達・参照されていたことを示している。「はじめに」で述べたように，ターリブ裔系譜学の成立は，西はエジプトから東は西トルキスタンに及ぶ地域の系譜学者たちの間での広域的なネットワークの成立と，当該ネットワークに属した系譜学者たちの世代をまたいだ師弟関係によって性格づけられる。それを踏まえジャウワーニーからの引用で触れられる学者たちを見てみると，シャイフッシャラフ（イラク出身），ウマリー（イラク），ディマシュキー（シリア），イブン・ハッダーウ（エジプト）は，問題のネットワークのそれぞれの時期における重要な構成員であった［Morimoto 1999 : 549-551］。加えて文中の「アブー・アブドゥッラー・ブハーリー」も，やはり当該ネットワークの重要構成員であったアブー・ナスル・サフル・イブン・アブドゥッラー・ブハーリー（イラク）を指す可能性が高いと判断される[30]。さらにシャブル・イブン・タキーン（エジプト）も，ターリブ裔に関して特に強い専門性を主張していたかどうかは不明であるが，系譜学の分野でイブン・ハッダーウに教えたことが知られ，またその著作がウマリーによって評価・利用されていたことが確認される系譜学者である［Kammūna 1972 : 206-207 ; Mar'ashī 1989-90 : 37 ; Abū Zayd 1998 : 127-128］。

ただし，これと同時に，ファーティマ朝の血統を否定したとして言及される学者たちが，これら確立期のターリブ裔系譜学の専門家たちとは明らかに毛色を異にする者たちであることにも触れておかなければならない。イブン・ハズムは言うまでもなく，他の身元不詳の二人のうち，少なくともイブン・ワキーウはマグリブ・アンダルス方面で活動した者であったように見受けられる。これは，ここでの主題が北アフリカで勃興したファーティマ朝の系譜であることを差し引いたとしても，この時代におけるエジプトにおける系譜学が，その西に連なる諸地域の系譜学とも繋がりを持っていたことを示すものと言えよう。

ジャウワーニーとターリブ裔系譜学確立期の学者たちとの連続性は『ファーディルのための入門書』にも見て取ることができる。前述のように『入門書』はアラブ系譜一般を対象とする作品ではあるが，この作品で最も頻繁に引用されるのはシャイフッシャラフである。またジャウワーニーは，預言者ムハンマドからアダムにいたる系譜を一息に述べた直後にその

30）ブハーリーについても Morimoto 1999 : 549-551 参照。

系譜は「系譜学における我々の師匠たち」(shuyūkhunā fī al-nasab) が認めたものであると述べ，そうした師匠たちを例示するが，そこではシャイフッシャラフ，ウマリー，ディマシュキー，「ブトハーウィー」(al-Buṭḥāwī)，ブハーリー（上と同様アブー・ナスル・ブハーリーを指すものと思われる)，「シャジャリー」(al-Shajarī)，アフタスィー (al-Afṭasī)，アルカティー，そして「アッバースィー」の名が挙げられている[31]。さらに『入門書』の別箇所で再び預言者ムハンマドの系譜を論じたジャウワーニーは，自説が正しいことの根拠としてそれが自らの直系の師たちによって伝えられてきたものであることを述べるが，その際に彼が示す師弟関係の鎖は，イブン・ハイダラ・アルカティー＜ムハンマド・イブン・ムハンマド・イブン・ヒバトゥッラー・アフタスィー＜ウマリー＜シャイフッシャラフというものである [Jawwānī 2006 : 118-119]。この師弟関係の鎖により，ジャウワーニーは，その師であったアルカティー，そしてその師であったアフタスィーを通じてターリブ裔系譜学確立期の学者たちの系統に連なっていたことが分かる。マクリーズィーによると，ジャウワーニーの師匠の師匠であるアフタスィーは，「系譜学者アブー・アル=ガナーイム・ザイディー [ディマシュキーの異名] の本の続編」を執筆した [Maqrīzī 2002-04 : 4 : 147]。これがディマシュキーのよく知られた著作『熱望する者たちの目の喜び』(*Nuzhat ʿuyūn al-mushtāqīn*) を指すことは間違いない。このこともまた，アフタスィーとターリブ裔系譜学確立期の学者たちとの間に存在した学問的な連続関係を示していると言える。

なお，ジャウワーニーはこの師弟関係の鎖を呈示する中で，ウマリーからアフタスィーへのムハンマドの系譜に関する情報の伝授はシリアのトリポリで行われたと述べている[32]。マクリーズィーによると，アフタスィーは 462/1069-70 年にトリポリで生まれ，アスカラーン（アスカロン）のカーディー職を務めるなどした後にシリアからエジプトへ移住し，エジプトでも司法関係の職務を歴任した人物であった。ミスルのナキーブの候補とされたこともあるという彼は，カイロで 517/1123-24 年か 518/1124-25 年に没したとされる[33]。以上を踏まえると，ジャウワーニーの示す師弟関係の鎖は，シリアで学んだアフタスィーがエジプトでアルカティーに伝えたという，学者の移動に伴う知識の伝播の過程をも反映しているものと理解される。

---

31) Jawwānī 2006 : 57. かぎ括弧でくるんだ「ブトハーウィー」「シャジャリー」「アッバースィー」はいずれも広く見られるニスバであり，これのみにもとづく身元の同定は困難である。アフタスィーについては本文直下参照。

32) 伝授は 477/1084-85 年に行われたと記されている。この年代に関しては主にウマリーの活動時期との関係から考察の余地があるが，ここでは踏み込まない。

33) Maqrīzī 2002-04 : 4 : 147-148. マクリーズィーはアフタスィーが 501/1107-08 年にカイロにやってきたと述べるが，これが彼のシリアからエジプトへの移動と一致するのかは明らかでない。またマクリーズィーは，アフタスィーがファーティマ朝政権の実力者バドル・ジャマーリーによって 478/1085 年に建設された集会モスクの説教師職にモスク完成とともに就任し，最初の説教を行った後にすぐに没したとも述べている。これは彼自身が述べるアフタスィーの生没年と見比べて不自然である。Maqrīzī 2002-04 : 4 : 918 も参照。

ターリブ裔系譜学確立期の系譜学者たちが，ジャウワーニーによって，また彼が活動した環境において，権威と見なされていたことは，イブン・アル=アディームが引用する584/1188年のアレッポ訪問に関連するジャウワーニー自身による記述からも確認することができる。アレッポに入ったジャウワーニーはある「偽称者」の血統を否定したことにより，その偽称者との係争に巻き込まれることになったが，問題の偽称者が自らの主張を裏打ちするために行っていたことの一つは，ディマシュキーの『熱望する者たちの目の喜び』の関連箇所の改竄であったという。またジャウワーニーと偽称者は両者のやりとりの過程でともに，ジャウワーニーが「我々の師，系譜学者の先達」(shaykhunā imām al-nassābīn) と呼ぶウマリーの著作の内容に言及している［Ibn al-ʻAdīm 2016 : 3 : 403, 406］。アレッポでの係争の両当事者が，ディマシュキーとウマリーをターリブ裔系譜学の重要な権威と見なしていたことは明白である。

以上のように，ジャウワーニーの事例からは，12世紀のエジプト，そしてシリアでのターリブ裔系譜に関する知識が，主として10世紀，11世紀のターリブ裔系譜学確立期の系譜学者たちの遺産に依拠するものであったことが理解される。ジャウワーニーがアンダルス・マグリブの学者たちの作品や言葉を資料として用いていたのは事実であり，そのことはエジプトの地域的特性を反映する要素として重要である。しかし，12世紀のエジプトとシリアが，ターリブ裔系譜学確立期の学者たちの学問的遺産を継承した地域の一つに数えられるべきことに疑問の余地はない。

ジャウワーニーの学問的系統に関するこの知見は，しかし，彼の活動にエジプトならではの特徴がなかったことを意味するものではない。ジャウワーニーはカイロの地域性を濃厚に反映した著述活動も行っている。彼は，大稔哲也の研究［大稔 2018］などによってよく知られるカイロにおける墓廟参詣慣行の隆盛に寄与した著述家の一人でもあったのである。ジャウワーニーがこの主題に関連して『シャリーフたちの墓廟』とサイイダ・ナフィーサの美質についての書を著したことはすでに述べた。実際，彼の名前はマムルーク朝期に著された墓廟参詣案内書でしばしば言及される。イブン・アッザイヤート（814/1412年没）はその著書『大小カラーファにおける参詣の方法に関する諸惑星』において，彼以前に「信仰正しき人々［の墓］への参詣」(ziyārat al-ṣāliḥīn) に関して書物を著した人々の一人としてジャウワーニーに言及するだけでなく，複数の墓廟に関連してジャウワーニーの言を引用している［Ibn al-Zayyāt 1907 : 4, 21, 34, 35, 38 他多数（Asʻad Ibn al-Naḥwī, Asʻad al-nassāba で索引を見よ）］。なかでもイブン・アッザイヤートがサイイダ・ナフィーサ廟の由来の確かさを論じる際に言及する二人の権威のうちの一人がほかならぬジャウワーニーであることは特記に値しよう[34]。ジャウワーニーの言への依拠は，『諸惑星』に大いに依拠して著され

34）Ibn al-Zayyāt 1907 : 34-35. Rāġib 1977 : 28, n. 2 も参照。Maqrīzī 2002-04 : 4 : 837-843 におけるナフィーサ廟の記述も，ジャウワーニーのナフィーサに関する作品からの引用で始まる。

たサハーウィー・ハナフィー（889/1484 年以降没）の『地誌と墓廟に関する親愛なる者たちへの贈り物・探究者が求める書』にも見ることができる［Sakhāwī al-Ḥanafī 2014 : 70, 113, 117, 146, 148, 151, 182. 同書 144 も参照］。

ユースフ・ラーギブによれば，ジャウワーニーのサイイダ・ナフィーサに関する著作は，カイロ・エジプトにおけるナフィーサ崇敬の高まりを示す伝承の流布およびナフィーサ像の神話化を示す最初の兆候に数えられる［Rāġib 1976 : 66-67］。加えて，ジャウワーニーが『シャリーフたちの墓廟』を著したこと，預言者一族（アリー一族を主たる構成要素とする）の様々な成員の墓に関する彼の言がマムルーク朝期の参詣案内に引用されていることは，彼がカイロに所在する他の預言者一族成員の墓廟に対する参詣の振興にも与っていたことを示している。同時に，マムルーク朝期の両参詣案内におけるジャウワーニーからの引用は，預言者一族に属さない墓廟の主たちに関する言明をも含んでいる。墓廟参詣振興者としてのジャウワーニーの活動は，預言者一族を中心とするものであったと考えられるが，それに限られたものではなかった。

実は，サイイダ・ナフィーサ廟の由緒正しさが主張される際にジャウワーニーと並んで言及されるもう一人の人物も，カイロで 13 世紀に活動したターリブ裔系譜学者であり，彼についても墓廟参詣振興への貢献が見て取れる[35]。預言者一族，そして他の「信仰正しき人々」の墓廟への参詣の振興は，したがって，カイロ在住のターリブ裔系譜学者が関わっていた一つの特徴的な活動領域であると見なすことができるようである。なお，文献類型としての墓廟参詣案内は，「次に路地を右に入るとかくかくしかじかの廟の入り口が見える」というような記述内容から容易に理解できるように，地誌という文献類型と近い関係にある。ジャウワーニーがカイロの地誌を著したことも，彼がこのように墓廟参詣の振興に与っていた人物であることを踏まえると理解しやくすくなる。

お わ り に

ジャウワーニーは，彼に続く時代にイラクで活動したターリブ裔系譜学者たちの著作において，二つの文脈で簡単に言及されている。最後にこのことに触れて稿を閉じる。

まず彼は，イブン・イナバの著した系譜文献において，ミスルのナキーブであった彼がその血統を否認したのにもかかわらず，後に「ごり押し」（ẓulm wa ʻudwān）を通じてターリブ裔の台帳（jarāʼid）に登録されるようになったという人物についての記述の中に登場する。ここでのジャウワーニーは，系譜の審査を正しい原則と手続きに従って行った「信頼に値する系譜学者」（nassāba-ʼi muʻtabar）とされる[36]。

35） この人物（イブン・B-L-L-W-H）については別途論じたい。

36） Ibn ʻInaba 1984-85 : 119. Ibn ʻInaba 2004 : 164 も参照。なお，両テクストにおいて，ジャウワーニーは「イブン・アル=ジャウワーニー」と呼ばれている。

ジャウワーニーがイラク系のターリブ裔系譜学者による文献に登場するもう一つの文脈は，最初のものとは対象的に，彼の系譜への疑問視というものである。イブン・イナバは，ナジャフ／クーファのターリブ裔系譜学者であったアブドゥルハミード・イブン・アブドゥッラー・タキー（12世紀に活動）が，おそらくエジプト（そうでなければシリア）在住であったと考えられるナスィーブルムルク（Nasīb al-Mulk）・アリー・イブン・アリー・イスマーイーリーというフサイン裔の人物から，ジャウワーニーの系譜の真正性を否定する手紙を受け取ったと記す［Ibn ʿInaba 2004 : 293, 389］。また，イラクの代表的なターリブ裔系譜学者であるクサム・ザイナビー（Qutham al-Zaynabī ; 550/1155-56～607/1210-11年），イブン・アル=ムルタダー（664/1265-66年以前没），ラディーユッディーン・イブン・カターダ（Ibn Qatāda ; 681/1283年没）が，それぞれにジャウワーニーの系譜の問題点を指摘したことも報告されている[37]。ただし，ナスィーブルムルクからの手紙の一件と後のイラクの系譜学者たちの態度とをどの程度関連づけて理解すべきなのかは現状では必ずしも明確ではない。

「はじめに」で述べたように，筆者は，12世紀以降，ターリブ裔系譜学は局地化の局面を迎えたと考えている。そのような見通しのもと，本稿では，12世紀のエジプトおよびシリアで活動したジャウワーニーを素材とし，彼が活動した環境において受け継がれていたターリブ裔系譜についての専門知識がどのような系統に属すものであったのかを解明した。それは，マグリブ・アンダルスの学者の見解の利用というエジプトの地理的位置を反映した特徴を見せながらも，大筋においては，かつてエジプトから西トルキスタンにおよぶ広域ネットワークの構築を通じて確立されたターリブ裔系譜学の専門的な知識を受け継ぐものであった。本稿での検討を発展させていくためには，ジャウワーニーの時代以後のエジプトにおける展開を解明することと並んで，局地化の局面においてエジプトのターリブ裔系譜学者たちがより東の系譜学者たちとどの程度の連絡を持っていたのかを考えていくことが望まれる。その意味で，イラクのターリブ裔系譜学者が著した書物に見られるジャウワーニーに関する上記二種の言及は，ジャウワーニーの時代およびそれに続く時代のエジプトおよびシリアのターリブ裔系譜学者たちとイラクの系譜学者たちとの間に少なくともいくらかの情報のやりとりがあったことを示すものとして価値を持つと言うことができる[38]。

37）三人の系譜学者へのまとめての言及はIbn ʿInaba 2004 : 389。加えて，イブン・アル=ムルタダーについてはIbn Muhannā n. d. : 110a ; Ibn al-Ṭiqṭaqā 1997-98 : 287。

38）なお，Ibn Zuhra 1962 : 72に見られる，アフマド・リファーイー（578/1182年没）がイラクのウンム・アビーダで没した際にジャウワーニー（文中ではal-qāḍī al-kāmil Asʿad b. ʿAlī al-Ḥusaynī al-Jawwānī qāḍī al-quḍāt bi-Miṣr）がそこに居合わせ，追悼の詩を詠んだとする記述は信頼できない。この記述は，種々の根拠から，19世紀後半から20世紀初頭という時期に，当時のリファーイーヤ・カーディーリーヤ間の対立を背景として，リファーイーヤ側のアブー・アル=フダー・サイヤーディーが主導する形で行われた，一連の系譜書改竄の一部をなすものと判断される。紙幅の関係からこの判断の論証は別の機会に譲らざるをえないが，この記述が信頼に値しないこと自体は以下の二つの根拠を挙げれば充分に了解されよう：(1) この記述を含むリファーイーに関係するテクスト（Ibn Zuhra 1962 : 71-74）が，シャリーフ・ムルタダーの子孫に↗

参考文献

Abū Zayd, Bakr b. ʻAbd Allāh (1998) *Ṭabaqāt al-nassābīn* (2nd ed.), Beirut.

Brockelmann, C. (1937-49) *Geschichte der arabischen Litteratur*, rev. ed. of vols. 1-2 and 3 supplement vols., Leiden.

Dār al-Kutub al-Miṣriyya (1930) *Fihris al-kutub al-ʻArabiyya al-mawjūda bi'l-Dār*, vol. 5, Cairo.

Ibn al-ʻAdīm (2016) *Bughyat al-ṭalab fī ta'rīkh Ḥalab*, 12 vols., ed. M. ʻĪ. al-Rawāḍiyya, London.

Ibn Bakkār, Zubayr (n. d.) *Jamharat nasab Quraysh wa-akhbāruhā*, MS Köprülü Library, Fazıl Ahmed Paşa 1141.

Ibn Ḥajar al-ʻAsqalānī (2002) *Lisān al-mīzān*, 10 vols., ed. ʻA. Abū Ghudda, Beirut.

Ibn ʻInaba (1984-85) *al-Fuṣūl al-fakhriyya*, ed. J. Muḥaddith Urmawī, Tehran.

Ibn ʻInaba (2004) *ʻUmdat al-ṭālib fī ansāb Āl Abī Ṭālib*, ed. M. al-Rajāʻī, Qom.

Ibn Muhannā al-ʻUbaydalī (n. d.) *Tadhkirat al-ansāb*, MS Āstān-i Quds-i Raḍawī 3626.

Ibn Rajab (2005) *Dhayl ʻalā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*, 5 vols., ed. ʻA. b. S. al-ʻUthaymīn, Riyadh.

Ibn al-Ṣābūnī (1957) *Takmilat Ikmāl al-Ikmāl fī al-ansāb wa'l-asmā' wa'l-alqāb*, ed. M. Jawād, Baghdad.

Ibn al-Ṭiqṭaqā (1997-98) *al-Aṣīlī fī ansāb al-Ṭālibiyyīn*, ed. M. al-Rajāʻī, Qom.

Ibn al-Zayyāt (1907) *Kitāb al-Kawākib al-sayyāra fī tartīb al-ziyāra fī al-Qarāfayn al-Kubrā wa'l-Ṣughrā*, Cairo.

Ibn Zuhra (1962) *Ghāyat al-ikhtiṣār fī al-buyūtāt al-ʻAlawiyya al-maḥfūẓa min al-ghubār*, ed. M. Ṣ. Baḥr al-ʻUlūm, Najaf.

ʻImād al-Dīn al-Iṣfahānī (2005) *Kharīdat al-qaṣr wa-jarīdat al-ʻaṣr : Qism shuʻarā' Miṣr*, 2 vols., ed. A. Amīn et al., Cairo, 1951, repr., Cairo.

Jawwānī, al- (1962) *Mukhtaṣar min al-kalām fī al-farq bayn[a] man ism abīhi Sallām wa-Salām*, ed. Ṣ. al-Munajjid, Damascus.

Jawwānī, al- (1996) *al-Shajara al-Muḥammadiyya*, ed. Kh. S. al-Zayd, [Kuwait].

Jawwānī, al- (2006) *al-Muqaddima al-fāḍiliyya : Tuḥfa ẓarīfa wa-muqaddima laṭīfa wa-hadiyya munīfa fī uṣūl al-aḥsāb wa-fuṣūl al-ansāb*, ed. T. b. M. al-Qaddāḥ al-ʻUtaybī, Riyadh.

Kammūna al-Ḥusaynī, ʻA. (1972) *Munyat al-rāghibīn fī ṭabaqāt al-nassābīn*, Najaf.

Maqrīzī, al- (1991) *Kitāb al-Muqaffā al-kabīr*, 8 vols. ed. M. al-Yaʻlāwī, Beirut.

Maqrīzī, al- (1996) *Ittiʻāẓ al-ḥunafā' bi-akhbār al-a'imma al-Fāṭimiyyīn al-khulafā'*, 3 vols., ed. J. Shayyāl (2nd ed.), Cairo.

Maqrīzī, al- (2002-04) *al-Mawāʻiẓ wa'l-iʻtibār fī dhikr al-khiṭaṭ wa'l-āthār*, 6 pts., ed. A. F. Sayyid, London.

↘ ついての記述を前後に割る形で不自然に挿入されたものであるのが明白なこと；(2) リファーイーに関する挿入テクスト中の72頁には，挿入箇所直後の74頁に見られる作品本来の記述を誤解した結果と考えられる，作品の著者とされる系譜学者イブン・ズフラ（921/1515-16年没）にはとても帰すことができない初歩的な誤り（『系譜の台帳』（*Dīwān al-nasab*）という著名な作品の著者を別人と誤解）が見られること。

Mar'ashī, Sh. al- (1989-90) Kashf al-irtiyāb fī tarjamat ṣāḥib *Lubāb al-ansāb wa'l-a'qāb wa'l-alqāb*. In : Ibn Funduq, *Lubāb al-ansāb wa'l-alqāb wa'l-a'qāb*, 2 pts., ed. M. al-Rajā'ī, Qom, 5-158.

Morimoto, K. (1999) The Formation and Development of the Science of Talibid Genealogies in the 10th & 11th Century Middle East. *Oriente moderno* n. s. 18, 541-570.

森本一夫 (2004)『サイイド・系譜学者・ナキーブ：十世紀後半から十五世紀前半におけるサイイド／シャリーフ系譜文献の研究』東京大学博士論文.

Morimoto, K. (2007) Putting the *Lubāb al-ansāb* in Context : *Sayyid*s and *Naqīb*s in Late Saljuq Khurasan. *SIr* 36, 163-183.

Morimoto, K. (2016) Sayyid Ibn 'Abd al-Ḥamīd : An Iraqi Shi'i Genealogist at the Court of Özbek Khan. *JESHO* 59, 661-694.

Morimoto, K. (2019) al-Jawwānī. In : *EI*3, 2019-1, 101-102.

Morray, D. (1994) *An Ayyubid Notable and His World : Ibn al-'Adīm and Aleppo as Portrayed in His Bibliographical Dictionary of People Associated with the City*, Leiden and New York.

Mundhirī, al- (1984) *al-Takmila li-Wafayāt al-naqala*, 4 vols., ed. B. 'A. Ma'rūf (3rd ed.), Beirut.

Nuwayrī, al- (2004) *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*, 33 vols. in 15 pts., ed. M. Qumayḥa et al., Beirut.

大稔哲也 (2018)『エジプト死者の街と聖墓参詣：ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史』山川出版社.

Öz, M. (1993), Cevvânî. In : *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 7, Istanbul, 464.

Qifṭī, al- (1970) *al-Muḥammadūn min al-shu'arā' wa-ash'āruhum*, ed. Ḥ. Mu'ammirī, Riyadh.

Qifṭī, al- (1986) *Inbāh al-ruwāt 'alā anbāh al-nuḥāt*, 4 vols., ed. M. A. Ibrāhīm, Cairo and Beirut.

Rāġib, Y (1973) Essai d'inventaire chronologique des guides à l'usage des pèlerins du Caire. *REI* 41, 259-280.

Rāġib, Y. (1976) al-Sayyida Nafīsa : Sa légende, sa culte, et son cimetière. *SI* 44, 61-86.

Rāġib, Y. (1977) al-Sayyida Nafīsa : Sa légende, sa culte, et son cimetière (suite et fin). *SI* 45, 27-55.

Rosenthal, F. (1963) al-Djawwānī, Abū 'Alī Muḥammad b. As'ad. In *EI*2 2, 501.

Ṣafadī, al- (1931-2004) *al-Wāfī bi'l-wafayāt*, 30 vols. ed. H. Ritter et al., Leipzig et al.

Sakhāwī al-Ḥanafī, al- (2014) *Tuḥfat al-aḥbāb wa-bughyat al-ṭullāb fī al-khiṭaṭ wa'l-mazārāt*, ed. A. N. 'I. Ṣayyām, Cairo.

Sayyid, A. F. (2001) L'évolution de la composition du genre de Khiṭaṭ en Egypte musulmane. In : H. Kennedy (ed.) *The Historiography of Islamic Egypt (c. 950-1800)*, Leiden, 77-92.

'Umarī, Ibn Faḍl Allāh al- (2010) *Masālik al-abṣār fī mamālik al-a'ṣār*, 27 vols. in 15 pts., ed. K. S. al-Jubūrī, Beirut.

Yāqūt al-Ḥamawī (1993) *Mu'jam al-udabā' : Irshād al-arīb fī ma'rifat al-adīb*, 7 vols., ed. I. 'Abbās, Beirut.

Ziriklī, al- (1998), *A'lām : Qāmūs tarājim li-ashhar al-rijāl wa'l-nisā' min al-'Arab al-musta'ribīn wa'l-mustashriqīn* (13th ed.), Beirut.

（東京大学東洋文化研究所）